

平成16年10月8日
農林水産省 生産局

第2回家畜改良増殖目標についての研究会（乳用牛）の概要について

下記のとおり、家畜改良増殖目標についての研究会（乳用牛）が開催されました。

記

- 1 日時
平成16年10月7日（木） 10:00～11:50
- 2 場所
東京都千代田区霞が関1-2-1
農林水産省本館2階生産局第1会議室
- 3 出席者
委員：別紙のとおり
- 4 議事概要
事務局より配付資料の説明が行われた後、意見交換が行われました。委員からの主な発言は以下のとおりでした。

(泌乳能力・繁殖能力の目標について)
乳質については、乳蛋白質率の向上はともかく、無脂乳固形分率の向上を特記する必要はないのではないか
無脂乳固形分も乳代加算に含まれているので、酪農家は、無脂乳固形分の向上も目標にしてきた。無脂乳固形分率の数値目標は残すべき
北海道も将来的には、バター・脱脂粉乳からチーズにシフトせざるを得ない。そのためには乳蛋白質の向上は不可欠
望んで空胎期間が延びている訳ではないので、「不要な空胎期間」の表現は見直してもらいたい

(体型の目標について)
大型化を抑制するというのであれば、現状値を書き込むべきではないか
望ましい体の大きさは飼養環境によって異なる。体型の数値を書き込むと、数字が一人歩きするおそれがあるのではないか
体型について、体高は大きくなっているが、尻長や腰角幅は大きくなっていない。サイズだけではなく、後躯の充実等、体型のバランスについても考慮すべき

(目標の示し方等について)
ジャージー種については、全国で飼養されていることもあり、数値目標を策定すべきではないか
(独)
家畜改良センターは、ジャージー種について能力評価、情報提供、地域の取り組みへの支援等を行っており、ジャージー種の改良から手を引くという事ではない
ジャージー種については、その多様な飼養実態を考慮すれば、全国一本の数値目

標を定めるよりも、品種の特性を活かしつつ、地域の実情に合わせて都道府県家畜改良増殖計画で対応すべきではないか

今回の家畜改良増殖目標の大きな変化の一つは、遺伝的改良量の目標を明記すること。その一方、いまだに全国の平均値を目標としている。データの分布や多様性を考慮する等、現場を反映した目標に改善する努力は続けるべき

目標に書き込むかどうかにかかわらず、日本のような資源小国において、乳用牛の肉資源としての必要性の認識が必要

(目標達成のための改良手法等について)

消費者の安全・安心へのニーズに応えるには、牛の個体ごとの数値データが得られる牛群検定は不可欠であることを記述するとともに、検定の普及にとどまらず加入しやすい牛群検定のあり方についても書き込むべき

生乳に勝る製品はない。これからは生乳も質の競争になる。「生乳のための牛群検定」と捉え、更なる普及を推進すべき

牛群検定と後代検定に加え、血統登録も乳用牛改良事業の根幹と位置付けるべき。

体型の変化の検討のために、信頼できる調査・データの蓄積が必要ではないか

改良の安定的な実施のためにも、後代検定に限らず、牛群検定、登録、体型調査といった乳用牛改良体制全体について、効率的な事業実施のあり方を検討すべき

問い合わせ先

〒100-8950 東京都千代田区霞ヶ関1-2-1

生産局 畜産部 畜産振興課

Tel 03-3502-8111 (内線3907、3908)

03-3591-3656 (直通)

Fax 03-3593-7233

担当：俵積田、佐々木、村田

「家畜改良増殖目標についての研究会（乳用牛）」出席委員

（五十音順・敬称略）

伊佐地 誠 （社）中央酪農会議専務理事

石橋 榮紀 （社）北海道酪農検定検査協会副会長

稲継 新太郎 （社）日本ホルスタイン登録協会専務理事

亀田 康好 酪農自営業

酒井 豊 （独）家畜改良センター新冠牧場長

鈴木 三義 国立大学法人帯広畜産大学畜産科学科教授

*赤池 政彦 北海道農政部酪農畜産課酪農グループ主査

富樫 研治 （独）農業・生物系特定産業技術研究機構
北海道農業研究センター畜産草地部長

長岡 正二 （社）家畜改良事業団顧問

水谷 正博 （社）日本乳業協会専務理事

（計10名）

（ は座長、 竹林委員（北海道農政部農政課長）代理）